



九工大 中村記念館 藤田ギャラリー

■藤田哲也博士記念会の発足

藤田哲也博士逝去の翌年1999年に、「藤田記念館建設準備委員会」を立ち上げ、後に「藤田哲也博士記念会」と改称し活動を開始。米国シカゴ大学から、藤田博士のコンテナ2.5個分の研究遺品を持ち帰り保管するとともに、2001年北九州博覧祭にて藤田ブース出展。

■顕彰・啓発活動

顕彰活動 ①全資料の整理・保管 ②全論文と研究資料のデジタル化 ③研究機械の整備・保管 ④顕彰結果の発表 他。

啓発活動 ①講演会活動 ②展示会開催 ③マスコミ対応 ④情報配信 他。

■九工大中村記念館に藤田ギャラリーの常設展示
竜巻の世界的権威である藤田哲也博士の研究に関する資料等を展示し一般公開しています。藤田博士がアメリカの研究室で使用していた机や愛用のカメラのほか、研究を紹介したパネルや受賞した勲章、著書等を展示しています。

場所/九州工業大学内 百周年中村記念館1F
福岡県北九州市戸畑区仙水町1-1
開館日・開館時間/
平日9:00~17:00



藤田博士自伝の復刻版
「ある気象学者の一生」

ドクター・トルネード 藤田哲也

藤田哲也原著
藤田碩也編集

700円(税込)

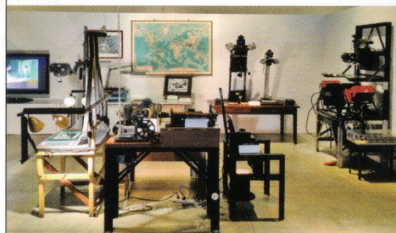
購入希望の方は
送り先、必要冊数を明記の上、
事務局へFAX又はE-mailで申し込み下さい。



藤田哲也博士記念会 会員募集

記念会では、博士の偉業の顕彰活動や講演会や出前授業等の啓発活動のほか、月に一度 例会を開催し、シカゴ大学の研究室から移送した藤田博士の研究機材や論文などの整理を行っています。

藤田博士の功績を次世代に伝えるための活動を手伝ってくれる方を募集しています。



連絡及び問い合わせ先
藤田哲也博士記念会事務局(橋本昭雄宅)
〒800-0213 北九州市小倉南区中曽根東4-2-7
Tel/Fax. 093-471-6730
e-mail: ayuhashi@hotmail.co.jp

藤田哲也博士の顕彰・啓発活動を応援します。

小倉高校明陵同窓会
曾根地区活性化21の会

Who is Mr. Tornado

気象学で世界を救った
藤田哲也を知っていますか?

世界に誇る気象学者“ミスター・トルネード”

藤田哲也



藤田スピリットに

触れる。

北九州市で生まれ育った

世界が認める気象学者 藤田哲也。

その偉大な功績と研究にかけた思いを
次世代に語り継ぐために。

藤田哲也は32歳で渡米し、アメリカで研究生活の大半を過ごしたため、残念ながら地元北九州市でもその偉業はあまり知られていません。

藤田哲也博士記念会では、北九州市で生まれ育った世界が認める気象学者藤田博士の偉大な功績と研究にかけた思いを次世代に語り継ぐことで、未来を拓く新しい科学者誕生を願って、さまざまな活動を行っています。

<http://fujitascale.sakura.ne.jp/>



北九州から世界へ

藤田博士の足跡

ふるさと北九州の自然を通して自然現象に興味を抱くようになった藤田少年。
活躍の場をアメリカに移した藤田博士は、世界が称賛する気象学のスペシャリストとして、
竜巻被害の減少と航空防災に多大な貢献を果たしました。

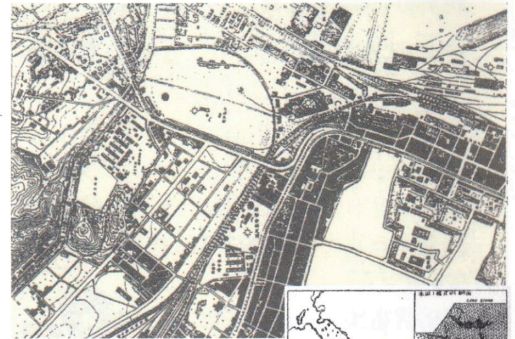
藤田博士の偉業

Great Achievements

少年時代 1920~1939

1920年、北九州小倉南区生まれ。曾根干潟や貫山での遊びを通じて潮の満ち引きと月の満ち欠けの関係を知るなど、自然への観察と科学への関心を深めていきました。

小倉中学校(現小倉高校)の体験旅行で大分県耶馬溪の青の洞門を訪れた時に、「もし、私に20年の時が与えられ、トンネルを掘るとしたら、前半の10年で掘削機械を開発し、後の10年で完成させる。そうすれば、トンネルは勿論、機械も残る」と感想文に書いたエピソードが知られています。研究に必要な機材は自ら設計・



▲旧制小倉中学校近傍図
中学5年の時、三角測量などの方法を駆使して、5000分の1の「小倉中学校近傍図」を完成させました。地形図から立体鳥瞰図を作ることを地理の先生に習っただけで、精度の高い地図を作り上げたことに、測量の専門家も驚いたという逸話が残っています。

▲藤田博士直筆のガリ版
母校である小倉中学校で物理と数学のカリキュラムを担当した時、毎回直筆のガリ版のテキストで授業にのぞみました。

▲長崎への原子爆弾投下後の1945年8月20~24日に明治専門学校(現九工大)調査団の一員として参加した藤田助教授の撮影写真。左手の校舎は撮影後台風で倒壊します。

明治専門学校時代 1939~1953

助教授時代には、母校の小倉中学の代用教員として物理や数学などを担当。生徒たちをワクワクさせた手作りの教材で工夫に満ちた授業を行うなど、生徒たちの探究心や知的好奇心を育みました。

1945年には原爆投下直後の長崎の原爆被害調査に赴き、自ら写真を撮影し、手書きの原爆被害地図を作成しました。この経験が後の「ダウンバースト」の発想につながります。1947年には背振山の観察小屋で「下降気流」を発見し論文を発表。この論文がシカゴ大学の研究者としての渡米のきっかけとなりました。



▲藤田博士が作成したF4、F5の竜巻の脅威をアピールするポスター

▲1939年(昭和14年)、給費特待生として機械工学科へ入学

▲左から2人目が藤田博士

▲1941年に藤田博士が提唱した「竜巻の二重構造」

▲1979年に送付されてきた1枚の竜巻写真が、大竜巻の中に潜んでいる子竜巻の存在を証明しました。

▲ダウンバーストの空気の流れ
1975年、アメリカのジョン・F・ケネディ空港で航空機事故が発生。調査を依頼された藤田博士は事故機の残した記録を気象学的に調査し、原因はパイロットの操縦ミスではなく、雷雲から下降してきて地面に激突し放射状に広がった強風だと推定し、不可解な航空機事故の謎を解明しました。これまでの気象学にはないこの新型強風を、下向き(ダウン)し爆発的に広がる(バースト)組み合わせで、「ダウンバースト」と命名しました。この発見は、その後の航空安全に大きな貢献をもたらしました。

▲ダウンバーストを補足するために、静止衛星や高度偵察機等や風向風速計27に加えて、ドップラーレーダー3台を三角測量のために配置しました。

▲長崎への原子爆弾投下後の1945年8月20~24日に明治専門学校(現九工大)調査団の一員として参加した藤田助教授の撮影写真。左手の校舎は撮影後台風で倒壊します。

▲長崎原爆の被害図
原爆の詳細な被害状況から長崎市内の被害図を作成します。赤い部分が強風被害が強かった地域

米国・シカゴ大学時代 1953~1998

シカゴ大学の気象学の権威であったバイヤース教授からの招聘を受け、1953年に東大の理学博士の学位を得て、シカゴ大学へ移住し研究者として活動をスタートさせました。1998年までの45年間の研究活動の中で約500報の研究論文を発表し、気象学上で多くの成果を残しましたが、中でも画期的といえるのが「竜巻の二重構造」と「ダウンバースト」の2つの発見です。

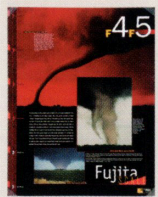
藤田博士は、1971年に竜巻の強さと被害の関係を表すF(フジタ)スケールを発表した後、竜巻研究の第一



竜巻の強さを表す国際的な標準単位「Fスケール」
当時、世界の約75%の竜巻が発生しているアメリカには、竜巻の強さを測る尺度がありませんでした。

F1 秒速17~32m 軽度の被害	F5 秒速33~49m 中程度の被害
F2 秒速50~69m かなりの被害	F3 秒速70~92m はげしい被害
F4 秒速93~116m 荒廃的被害	F5 秒速117~142m 信じられない被害

1971年、藤田博士は地震の規模を示すマグニチュードに相当するものとして、竜巻の被害状況から風速を推定できる基準Fスケールを提唱しました。Fは藤田のイニシャルからとったもので、現在はEF(改良Fスケール)で、現在はEF(改良Fスケール)が



藤田博士が作成したF4、F5の竜巻の脅威をアピールするポスター

藤田博士の偉業を語る上で欠かすことができないのは、数多くの研究や発見、提唱が気象学上の成果として現在に生かされているだけではなく、自然災害や航空機事故から人々を守るという点でも、社会的に大きな貢献があったことです。

その画期的な研究業績が高く評価され、気象学のノーベル賞と呼ばれるフランス航空宇宙アカデミー Vermeil Gold Medalを受賞し、シカゴ大学で1989年当時58名のノーベル受賞者と全く同等の研究待遇を受けていました。

その他、日本気象学会藤原賞、米国航空安全財団アドミラル・ルイス・デ・フロイス賞、アメリカ航空宇宙学会ローシー大気科学賞、日本国政府勲二等瑞宝章等数多くの賞を授与されました。

